

# 2021 年度地域協働フィールドワーク

## 活動報告書



### 目次

p.2 はじめに

p.3 メンバー紹介

p.4 食糧支援について

p.9 交流会について

p.10 おわりに

## はじめに

北海学園大学経済学部を学生を対象とした特別講義「地域インターンシップ」がこの活動の母体です。地域インターンシップは2016年度に私たちの先輩たちが天売島を訪れた際に始まりました。島民の方々と触れ合っていく中で離島独特の地域性や天売島が抱える問題を知り、自分たちが天売島に何をするができるかを考えました。この時考え出されたものが、天売島での暮らしや仕事にまつわる歴史を次世代に伝えていくための書籍を作ることを、当時天売島に放置されていた空き店舗を再活用することでした。

6年目となった現在は、7名のメンバーで何か新しいことに挑戦していこうという想いがありましたが、新型コロナウイルスの影響で、大人数で天売島に行き活動することができるかどうか直前まで判断することが難しく、天売島に行くことができた際の活動プランと行けなかった際の活動プランを考える必要がありました。結果的に島への訪問は天候の影響で断念しましたが、島に行かなくてもよい活動プランに変更し、具体的に2つの取り組みを行いました。

学生たちにしかできないことでいくつもの活動プランを考え実現可能かどうか、その活動に何の意味があるのかを学生たちの中で何度も会議を行い、最終的には本校の食糧支援に羽幌の食料品を提供することでより多くの学生に地域協働フィールドワーク、天売島のことを認知してもらうことを目的とした活動と、今回天売島に訪問することができなかった代わりに、オンライン上で学生と島民、またOBの方たちも交えて交流会を行うことで、本プロジェクトへの理解を深める取り組みを行いました。

この報告書では今年度のメンバーが揃った4月から一年間の活動を報告させていただきます。最後になりますが、プロジェクトをご支援いただいたおらが島活性化会議様、天売島の島民の皆様、地域協働フィールドワークに関わる北海学園大学経済学部、北海道エンブリッジ様に感謝申し上げます。

2021年度 北海学園大学地域協働フィールドワーク

代表 経済学部地域経済学科 3年

森下 龍弥

## メンバー紹介

### ・3年

岩崎 竜平

桑折 大哉

原 彰吾

三浦 雅貴

小林 由和

森下 龍弥

### ・2年

茂庭 かり奈

# 食糧支援

桑折 大哉

「食糧支援」×「羽幌町の食材」

！今回ご協力頂いた先生！

「佐藤信(さとうまこと)先生」

：担当講義 ○非営利組織論 ○協同組合論 ○社会科学特別講義-協同組合と地域社会  
：学内担当 ○北海学園生協 理事長

きっかけ■ 食糧支援にも有志で参加されており生協にも詳しい先生なので、前回の食糧支援の際に学食案の相談を依頼したところ、快く引き受けて下さった。地域協働フィールドワークの講義にも参加して頂き意見交換をしたところ、学食での提供が情勢的に厳しいことがわかってきた。そこで教員有志の購入費用のうち10～15万円程を食糧支援に振り分けるので、羽幌町や天売島の食材を購入して提供してはどうかという提案を頂いた。

☆今回の感想

・許可申請や学園生協と生産者側の橋渡し役になり交渉しなければならない学食案に比べると、割り当てて頂いた金額の中で食材を購入するだけで実現できる食糧支援案は容易だと思っていた。

しかし、発注の手続きや、数量と金額のバランスを考えること、自治会の部員との打ち合わせなど、思いのほか時間がかかり大変だった。最終的には様々な方の協力によって成功させることができた。

来年度以降に向けては、食糧支援に限らず、何か大がかりな取り組みを行う場合はじっくり議論することも大事だが、実施できるまでは予想以上に時間と手続きを要するという教訓から、まずなんでもやってみてスピード感もある程度意識して取り掛かることも重要だと考えた。

☆当日の様子

大雪の影響で参加者が少なかったが、それでも300人以上に食材を、そのうち80人にパンフレットを配り終えることができた。えびラーメン、甘えびラーメン、鮭とば、お菓子の順番でなくなっていった。とくにラーメンはすぐに完売となった。羽幌町役場の平野さんから送って頂いたポスターを貼ったり配ったりした。

羽幌町コーナーでは濱田ゼミ所属で二部自治会部員の木下翼くんが協力してくれて、人員整理に手間取っているところを助けてくれた。

☆終了後

自治会執行部の方で食糧支援参加者の事後アンケートを行うが、佐藤先生の勧めで羽幌町の食材の感想や、天売・焼尻・羽幌の知名度、地域協働フィールドワークへの関心といった質問事項を加えてもらうことにした。現在は集計待ち。

個人的な感想と、参加した友人から聞いた評判としては、梅月のお菓子が非常に美味しく、重原商店の鮭とばはサイズが大きく本物だということ、えびラーメンはみその方が美味しかったといったところだった。

☆発注リスト

<条件>

☆予算 15万円程度

☆人数 462人

<方針>

☆海産物を1つ選ぶか、お菓子を2つ選ぶかの選択肢。

※1お菓子の場合、オロロンサブレ+もう1品

※2アレルギーを持つ方には「鮭とば」を渡す

<明細>

商品名	提供個数	1個の単価	1箱入	箱数	合計金額
オロロンサブレ	360	92	20	18	33120
ろっぺん鳥のたまご	108	168	9	12	18144
黒いダイヤ	96	162	8	12	15552
赤岩餅	72	162	12	6	11664
オロロン乱舞	81	156	9	9	12636
甘えびカレー	50	580	—	—	29000
えびラーメン	50	300	10	5	15000
鮭とば	43	500	—	—	21500
—	—	—	—	—	156616

<どんな商品？>

☆お菓子(梅月)

オロロンサブレ			
ろっぺん鳥のたまご			
黒いダイヤ			
赤岩餅			
オロロン乱舞			

<p>名物 金時羊羹 ※おまけで付けてくれた</p>			
<p>梅月オリジナルクッキー?! ※おまけで付けてくれた</p>			

☆海鮮系惣菜

<p>甘えびカレー (産直工房きたる)</p>			
<p>えびラーメン 味噌と塩 (産直工房きたる)</p>			
<p>中・左：鮭とば (重原商店)  右：羽幌・天売パン フレット (羽幌町)</p>			

☆食糧支援事前準備の風景





Ⅱ部自治会の部長さんと一緒に作業



朝の準備風景



羽幌コーナー全景



羽幌からの商品全種類

☆食糧支援当日の風景



終了後のミーティングと記念撮影



食糧支援実施中の風景  
(受付する自治会部員と並ぶ学生)

羽幌コーナーで一緒に  
配ってくれた木下翼くん

# 交流会

岩崎 竜平

## ・概要

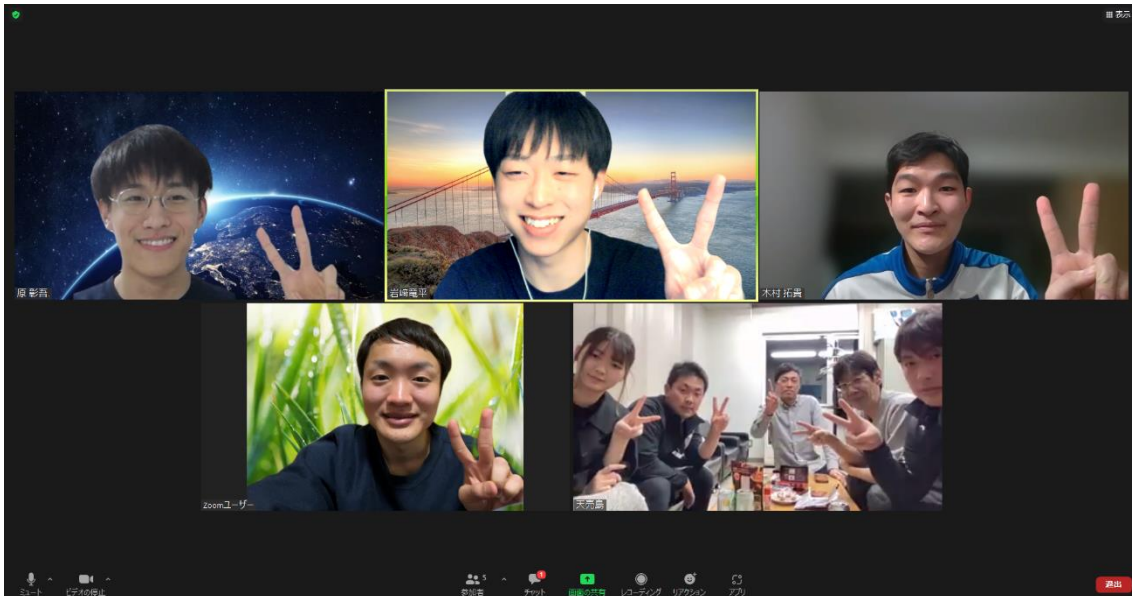
「第一回 島民×OBOG×学生の天売島交流会 in ZOOM」

日時：2022年3月6日（日）

実施形態：Zoom を用いたオンライン

また、事前に坂本さんと堅苦しくない交流会にしようと話しており、お酒ありのラフな交流会となりました。

## 当日の写真



※予定が合わず参加できなかった学生やOBの方々がいたので少人数となってしまいました。

## ・交流会を開こうと思った経緯

⇒新型コロナウイルスや天候の影響によって、直接天売の方に出向くことができず島民の方々との交流ができていなかった

⇒我々学生がより天売島について知りたかった

⇒OBOGの方々と島民の方々がもう一度交流できる場を設けたかった。

～感想～

直接天売島に行けなかった私達学生にとって、今回の交流会は島民の方々と接することができるとても新鮮な体験になりました。特に、交流会の終盤では、お酒のおかげもあってか、冗談を言い合える和やかな雰囲気の中でワイワイ話し合っただけで案を出し合ったりするほうがよかったな」と思いました。そして、OBの方々と島民の方々の会話からは、フレンドリーに名前を呼び合ったりする姿を見てプロジェクトの本来の姿を見ることができました。今年の活動は、直接島と接する時間がなかったことで坂本さんを含める島民の方々と距離感がまだまだあったと感じとても悔しい思いが残りました。また、島民の方々は、口々に「天売島のことは実際に天売島に来ないとわからない」と言っていたので、直接島に足を運びたいという思いが強く残りました。そして最後に、OBの方々が島民の方々に「今度もし時間があったら会いましょう」と言っていたので、今回の交流会は、新たに接するきっかけをつくり、我々学生のみならずOBの方々、島の方々の双方にとって非常に有意義なものになったのではないかと感じます。

## おわりに

今年度で6年目となった活動でしたが、昨年から蔓延しているコロナウイルスの影響により、島訪問の時期や活動内容など、どのタイミングで確定できるかなどが一切予想することができなく、限られた時間の中で複数のプランを並行して考える必要があったり、メンバーほとんどが天売島に訪問したことがない状態での活動進行だったので正直、しっかりと活動を行うことができるのかどうか不安でした。

ですが、そんな状況の中でもできる限りの仮説を考えそこにアプローチできる活動はどんなものだろうかと沢山話し合ってきました。結果的に島訪問も叶わずほぼすべての内容が実現することはありませんでしたが、今年度考えたアイデアや学生たちの想いを来年度の活動にも引き継ぐことで、何かしらのヒントになってくれれば良いと思います。

来年度も、天売島を訪問することが厳しい状況であると思いますが、どのような状況になっても、天売島のことに真剣に考えることで、必ずやれることがなにかしらあると思います。現時点では、それが何なのかを示すことはできませんが、来年度には、それが天売島のためになるのか、誰のためになるのかを改めて考えて、新しいことを始めて行けたらと思います。この気持ちをもって、今年度の反省も生かし、しっかりと活動を継続していけるよう尽力したい所存です。

最後になりますが、例年では、1年に数回の訪問といった形でしたが、現在では、それすらもかなわない状況になりうるかもしれません。どのような状況になったとしても、島民の皆様、関係者の皆様 の、変わらないばかりか、より暖かさを増していると感じますご厚意には、感謝の気持ちでいっぱいです。来年度以降もメンバーは変り、ご迷惑をおかけすることもあると思いますが、取り組みに対する情熱はしっかりと持っていると思いますので、今後ともお力添えをいただければ幸いです。

2021 年度 北海学園大学地域協働フィールドワーク

経済学部地域経済学科 3 年

森下 龍弥